弘前れんが倉庫通信

弘前れんが倉庫美術館を
もっと知るフリーペーパー

Hirosaki MOCA Letter

開館5周年
記　念　号

vol.11,12
合併号

TAKE FREE

2025年7月11日、弘前れんが倉庫美術館は開館5周年を迎えました。開館記念日を含む3日間は「れんがひろばのアートフェス」として、屋台出店やライブ、ワークショップなど多彩なイベントを開催。屋外にはアーティストのさとうりさによる色とりどりの作品が展示され、子どもから大人まで地域の人たちとともに5周年を祝いました。

開館5周年
2020〜2025年のハイライト

コレクションを知る

ジャン＝ミシェル・オトニエル《エデンの結び目》――ムラーノガラスの歴史と制作背景　澤田諒
尹秀珍《ポータブル・シティ：弘前》――古着という素材に注目して　佐々木蓉子

展覧会スケジュール

開館5周年 | 2020〜2025年

弘前れんが倉庫美術館

2020年の開館から5周年。弘前れんが倉庫美術館は年間2本の企画展を中心に、映画上映、音楽ライブ、ワークショップなど多様なイベントを開催してきました。

ナウィン・ラワンチャイクン《いのっちへの手紙》2020年　弘前れんが倉庫美術館蔵　撮影：畠山直哉

展覧会 ハイライト

会場風景　撮影：長谷川正之

Thank You Memory—醸造から創造へ—
会期：2020年6月1日〜9月22日

開館を記念して開催した展覧会。土地と建物の「記憶」に焦点をあて、この空間に合わせて新たに制作した作品を中心に紹介しました。

出品作家：尹秀珍、ジャン＝ミシェル・オトニエル、笹本晃、畠山直哉、藤井光、奈良美智、ナウィン・ラワンチャイクン、潘逸舟

「もしもし、奈良さんの展覧会はできませんか?」奈良美智展弘前 2002-2006 ドキュメント展
会期：2022年9月17日〜2023年3月21日

美術館になる前の煉瓦倉庫で開催された、弘前市出身の現代美術家・奈良美智による三度の展覧会の軌跡を振り返りました。2002年に開催された「I DON'T MIND, IF YOU FORGET ME.」から20年を迎え、資料や写真、映像で地域とアートの関係を再考しました。

「AOMORI GOKAN アートフェス 2024」メイン企画
蜷川実花展 with EiM：儚(はかな)くも煌(きら)めく境界 Where Humanity Meets Nature
会期：2024年4月6日〜9月1日

青森県内にある5つの美術館とアートセンターが連携して「AOMORI GOKAN アートフェス 2024」を初開催。当館では、写真家・蜷川実花とクリエイティブチーム・EiMとの協働による大規模個展を開催しました。2022年より継続的に撮影している弘前公園の桜の写真のほか、うつろう時間やながれゆく季節の境界を超える壮大なインスタレーションと初公開作品を含む近作を紹介しました。

蜷川実花 with EiM《Sanctuary of Blossoms》（部分）2024年　撮影：木奥惠三

会場風景（手前の作品：ユーイチロー・E・タムラ《草上の休息》2024年 弘前れんが倉庫美術館蔵）　撮影：木奥惠三

ニュー・ユートピア——わたしたちがつくる新しい生態系
会期：2025年4月4日〜11月16日

開館5周年記念展として開催。若手アーティストたちの作品や、1万5千年をさかのぼるともいわれる津軽地方の人間の営みに連なる歴史資料を、当館のコレクションを交えて紹介しました。

出品作家：川内理香子、小林エリカ、ユーイチロー・E・タムラ、渡辺志桜里、SIDE CORE、工藤麻紀子、奈良美智、佐藤朋子、さとうりさ、ナウィン・ラワンチャイクン、ジャン＝ミシェル・オトニエル、藤井光、大巻伸嗣、斎藤麗、永野雅子、細川葉子、畠山直哉、和田礼治郎、蜷川実花、松山智一

2020

2020.4.11開館予定が延期

新型コロナウイルスの感染拡大により、2020年4月11日に予定していた開館が延期に。7月11日にグランドオープンしました。2021年、2022年にも感染拡大防止のため臨時休館期間がありました。

2021

- 2020.6.1-9.22　開館記念 春夏プログラム Thank You Memory —醸造から創造へ—
- 2020.10.10-21.3.21　開館記念 秋冬プログラム 小沢剛展　オールリターン —百年たったら帰っておいで 百年たてばその意味わかる
- 2021年度 春夏プログラム りんご宇宙—Apple Cycle / Cosmic Seed
- 2021.4.10-8.29
- 8.31-9.30 臨時休館
- 2021年度 秋冬プログラム りんご前線—Hirosaki Encounters

2022

- 2021.10.1-22.1.19
- 1.19-3.31 臨時休館
- 2022年度 春夏プログラム 池田亮司展
- 2022.4.16-8.28

2023

- 2022.9.17-23.3.21
- 2022年度 秋冬プログラム「もしもし、奈良さんの展覧会はできませんか?」奈良美智展弘前 2002-2006 ドキュメント展
- 2023年度 春夏プログラム 大巻伸嗣—地平線のゆくえ
- 2023.4.15-10.9

2024

- 2023.10.27-24.3.17
- 2023年度 秋冬プログラム 松山智一展：雪月花のとき
- 2024.4.6-9.1
- AOMORI GOKAN アートフェス2024メイン企画 蜷川実花展 with EiM：儚くも煌めく境界

2025

- タグチアートコレクション×弘前れんが倉庫美術館 どうやってこの世界に生まれてきたの？
- 2024.9.27-25.3.9
- 2025.4.4-11.16
- 開館5周年記念展 ニュー・ユートピア—— わたしたちがつくる新しい生態系

2026

- 2025.12.5-26.5.17
- 開館5周年記念 杉戸洋展：えりとへり / flyleaf and liner

りんご前線—Hirosaki Encounters
会期：2021年10月1日〜2022年1月30日

国内最大のりんごの生産地として豊かな土壌を有する「弘前」の地を出発点に、弘前ゆかりのアーティストたちの作品や当地との出会いから生まれた多様な作品を紹介。

出品作家：小林エリカ、斎藤麗、佐野ぬい、塚本悦雄、村上善男、ケリス・ウィン・エヴァンス

ケリス・ウィン・エヴァンス《Drawing in Light (and Time) ...suspended》2020年 弘前れんが倉庫美術館蔵　撮影：柴田祥

大巻伸嗣《Echoes Infinity -trail-》2023年 撮影：木奥惠三

大巻伸嗣—地平線のゆくえ
会期：2023年4月15日〜10月9日

空間全体をダイナミックに変容させるインスタレーションで知られる大巻伸嗣の、東北地方初となる大規模個展。青森県内の風物や自然、信仰を取材し、人や自然、物質世界と精神世界の生と死が円環を成す死生観を大型のインスタレーションで展開しました。

出会う ラーニングプログラム

弘前れんが倉庫美術館は、展覧会を起点に、さまざまな出会いや対話の場を育んできました。アーティストによるトークやパフォーマンス、ワークショップなど、子どもから大人まで参加できる多様なラーニングプログラムを開催。作品を「観る」だけでなく、参加者自らが考え、語り合い、体験を共有する場を作ることで、感性を育む取り組みを継続的におこなっています。

「小沢剛展　オールリターン —百年たったら帰っておいで　百年たてばその意味わかる」関連プログラム
円卓会議＆ライブ「さよならだけが　人生ならば　また来る春は何だろう」
ライブ出演：小山内薫
（2021年3月7日）

「りんご宇宙—Apple Cycle / Cosmic Seed」関連プログラム
笹本晃《スピリッツの3乗》2020年 パフォーマンス
（2021年7月3日）

「もしもし、奈良さんの展覧会はできませんか?」関連プログラム
弘前エクスチェンジ #05「ナラヒロ」もしもし演劇部 成果発表会「A to A」
出演：もしもし演劇部部員
（2022年12月18日）
撮影：長谷川正之

「松山智一展：雪月花のとき」関連プログラム
アーティスト×ユーストークセッション
出演：松山智一（聞き手：学生）
（2023年10月29日）

タグチアートコレクション×弘前れんが倉庫美術館「どうやってこの世界に生まれてきたの？」関連プログラム
プレイフルワークショップ「コミュかん〜展覧会をみて・話して・共有する コミュニケーション×鑑賞の時間〜」 講師：太田歩（演劇ユニット 一揆の星）（2024年11月9日）

開館5周年記念展「ニュー・ユートピア—わたしたちがつくる新しい生態系」関連プログラム
SIDE CORE アーティスト・トーク
出演：SIDE CORE（西広太志、播本和宣、松下徹）
（2025年7月12日）
撮影：成田写真事務所

つながる 地域・市民と連携する

当館では、美術館をサポートいただく会員組織である「H-MOCAメンバーズ」やボランティア活動のプログラムである「れんが倉庫部」をはじめ、学校や地域団体、市民との連携を通じて、さまざまな活動に取り組んでいます。多様な方法で美術に触れ、人と人、地域と世界がつながる場づくりを進めています。

「れんが倉庫部」による建築ガイドツアー
2022年〜継続中
ボランティアスタッフが美術館の建物の歴史や、見どころを紹介するガイドツアーです。月1回程度開催しています。

美術館のお正月 ニューイヤーコンサート
2024年〜継続中
美術館には、さまざまな文化活動に取り組む人たちが集います。日頃の練習の成果を、お正月に披露しました。

勝川葉月さんによるヴァイオリン独奏
（2026年1月3日）

コレクションを知る

当館では、現代のアーティストたちが、弘前や津軽地方の文化や風土に触発されて制作した個性豊かな作品を所蔵しています。
本シリーズ「コレクションを知る」では、学芸スタッフそれぞれの専門的な視点から作品の魅力を紹介します。

ジャン＝ミシェル・オトニエル《エデンの結び目》ムラーノガラスの歴史と制作背景

澤田 諒
弘前れんが倉庫美術館 テクニカル・ディレクター

弘前れんが倉庫美術館に入り、展示室に入る直前のエントランスに吊るされた作品。近づいて見ると、鏡のように周囲の景色と見る者自身の姿が映り込んでいる。まるで金属のように見えるが鏡面ガラスでできている。金属の棒が複雑に曲がりながら一つの輪になっており、ビーズのように中央に穴の空いたガラス玉を突き刺す構造となっている。この作品は、2018年11月ジャン＝ミシェル・オトニエルが弘前にリサーチに訪れ、改装工事中の煉瓦倉庫、りんご公園などを見てまわり、弘前のりんごに着想を得て作られたものだ。本作のガラス玉は、ムラーノ島の工房で職人によって制作されている。

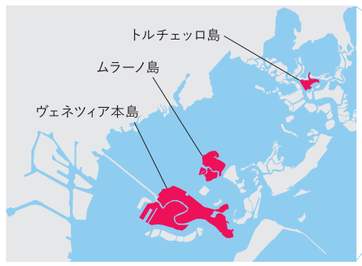
ムラーノ島とは、イタリアのヴェネツィア本島のすぐ近くにある、現在でもガラス産業が盛んな島である。5世紀頃、北イタリアの人々が他民族から追われ、現在のトルチェッロ島にあたる人の住んでいなかった潟（湾が砂州によって外海から隔てられ湖沼化した地形）に住み始めた。9世紀にもさらに他民族から追われ、現在のヴェネツィア本島にあたる場所に移動した。このあたりも潟となっており住むのには適していなかったが、地面に大量の木の杭を打って土台を作り、その上に家を作るという技術を使い土地を作り、街として発展していった。中継地として場所もよく港として発展し、世界中の物品が集まる場所となった。ガラスの原料が採れる場所ではなかったが、原料を集め、加工する場所として発展した。13世紀にガラスの加工の際に起こる火事、技術の流出を防ぐため、本島からすぐ近くにあるムラーノ島に職人と工房が集められた。島から逃げる者には厳しい罰を与え、功績を上げた者には報酬を与えるなどの法令も発令され、ガラスの一大産業がこの島で築かれ、現在まで続いている。

オトニエルは1964年フランスのサン＝テティエンヌ出身である。パリの美術大学に通い、当初は写真、インスタレーション、などさまざまなジャンルの作品を作っていた。硫黄、蝋などでも作品制作をしていたが、その後ガラスという材料に出合い、1992年ごろからムラーノガラスの工房で作品の制作を始めた。パリの地下鉄出入口に設置された《Le Kiosque des Noctambules（夢遊病者のキオスク）》（2000年）など、金属の棒とガラス玉で構成された多くのガラス作品を展開している。

《エデンの結び目》は、本来は2020年の開館に合わせて設置予定であった。作品の部品自体は完成していたが、コロナ禍で作家とスタッフが来日できず、2020年7月の開館時には代替のガラス作品を展示した。《エデンの結び目》の設置には重量と複雑な手順の問題もあり、さらに絶妙なバランス感覚が必要で、本来はスタジオスタッフしか設置できないものであったが、遠隔で日本の設置業者に方法を伝授し、2021年3月24〜27日の4日間に設置をおこなうことになった。設置にあたり、高い位置で作業をするためのベースとなる台を準備。作品の総重量はおよそ280kgあり、3本のケーブルで、梁に渡したH鋼に吊るしている。H鋼から吊るす金具は、耐荷重を強化するため鉄板を溶接し、特注で作られている。まずは金属の輪を吊るし、一つずつガラス玉を慎重にバランスを取りながら通していく。作家からは、本来は通路中央部に設置したいという希望があったが建物の構造上の理由で難しく、構造の専門家と相談してできるだけ壁からの距離が遠い現在の場での展示となった。すべてのガラス玉を通し、磨き、さらに作品が輝くようにできるだけ多くの箇所から照明を当て、作品の設置は無事に完了した。ガラス球の数は全部で156個あり、赤、ピンク、黄色など色がついているがよく見ると同じ色でも少しずつ微妙に色が違うことがわかる。遠いムラーノ島のガラス工房で、職人が一つずつ作ったことを想像しながら見てほしい。

作品設置時の様子

ジャン＝ミシェル・オトニエル《エデンの結び目》2020年
弘前れんが倉庫美術館蔵　撮影：トロロスタジオ



ムラーノ島の位置

尹秀珍《ポータブル・シティ：弘前》古着という素材に注目して

佐々木蓉子
弘前れんが倉庫美術館 アシスタント・キュレーター

尹秀珍《ポータブル・シティ：弘前》2020年　弘前れんが倉庫美術館蔵　撮影：木奥惠三

尹秀珍（イン・シウジェン）は、現代中国を代表する作家のひとりである。尹は、1963年、北京の労働者階級の家庭に生まれた。幼少期より裁縫などのものづくりに親しんでいたが、当時の芸術は、文化大革命下で毛沢東を賛美するプロパガンダを目的とした作品が主流であり、個人の内面を追求できる環境ではなかったという。1985年に美術大学に進学すると、改革開放による国外文化の流入に大きな刺激を受けた。1989年の大学卒業後は、大学で学んだ伝統的な絵画から、自然や日常生活の中の素材を用いた制作へと移行した。彼女の作品は、彫刻から屋外でのインスタレーションまで多岐にわたるが、急速な近代化やグローバリゼーションに伴う中国社会や人々の生活の変化に一貫して関心を寄せ、制作を行ってきた。こうした尹の作品に頻出する素材が「古着」である。

「ポータブル・シティ」シリーズは、古着を用いた、彼女の代表作のひとつである。「持ち運べる都市」を意味するその名の通り、ひらかれたスーツケースの中に、世界各国の都市が作り上げられている。2001年に初めて発表され、これまでに北京、ロンドン、ニューヨークをはじめ、40以上の都市を制作してきた。

尹は、1990年代後半、展覧会への参加のため国内外を頻繁に旅していた。各地の空港でベルトコンベアを流れるスーツケースを目にした時、それらを、グローバル化の中で世界中を絶え間なく移動する人々の仮の住まいのように感じたという。この経験から、現代の生活を象徴するモチーフとして、スーツケースを使用した作品のアイディアが生まれた。スーツケースの中に並ぶのは、オフィスビル、ランドマークである建造物、橋や道路、さらに、街を囲む山や川などの自然である。これらが、古着を素材に、針と糸で立体的に縫い上げられ、飛び出す地図のように配されている。

本シリーズに位置付けられる《ポータブル・シティ：弘前》は、弘前れんが倉庫美術館のためのコミッションワークである。尹は、制作にあたり、2019年に弘前を訪れた。弘前の街を歩いて出会い、心に残った風景や建物—改修工事中の吉野町煉瓦倉庫をはじめ、津軽のシンボルである岩木山や弘前城、大正期の建築群など—が、さまざまな色と質感の古着で作られている。使用された古着は、弘前の市民に提供を募り集まったものだ。「ポータブル・シティ」は、現実の都市の姿を忠実にあらわしたものではない。そこでは、尹がその街に滞在し、その土地を理解しようとする中で抱いた感覚や感情といった、主観的な印象が反映されている。作家は各都市を象徴する建造物を作品に取り入れ、その街の個性を捉えようと試みる。一方で、これまでに制作された「ポータブル・シティ」が、結果としていずれもどこか似通っていく現象は、グローバリゼーションによって世界が均質化していくさまを示しているようでもある。

尹は、古着という素材について、次のように語る。

> *服は第二の皮膚のようなものだと感じています。服には独自の表現言語があり、時代、そして歴史と結びついています。（…）中国のように急速な発展を遂げた国では、ファッションは驚くほど急速に変化します。人々による服のスタイルの選択と、古くなった洋服は廃棄しなければいけないという脅迫観念は、人々の生活と世界に対する態度を示すものです*[1]。

尹が作品の素材として古着を取り入れ始めた1990年代[2]、北京では急速な都市開発により歴史的建造物が次々と解体され、高層ビルや道路へと置き換わっていった。街の変化にともない、人々の暮らしのあり方も急変した。安価な既製品が普及する中で、古い洋服を繕って大切に着る文化は失われ、衣服を使い捨てる生活が広まった。同時期の世界的な美術の動向を振り返れば、衣服という素材が「個人の不在」や「記憶」と結びつき、あるいは土地のアイデンティティを象徴する役割を担う作例が多く見られるようになった[3]。尹の表現は、中国国外の特定の作家、作品から直接的な影響を受けたものではないが、結果としてこうした同時代の美術の潮流にも呼応していたといえる。

「ポータブル・シティ」は、作家の故郷・北京の街の変化への応答として生まれたゆえに、とくに中国国外の鑑賞者において、作品の受け止め方に違いが生じることは避けられない。しかし尹はむしろ、鑑賞者それぞれが、生まれ育った街の記憶を想起することで、作品との個人的な繋がりを感じ取ることを意図している。《ポータブル・シティ：弘前》もまた、市民個人の生活と結びつく古着を素材に、街のかつての姿が残され、弘前の街の記憶を辿るための装置として機能しうるものだ。尹の作品における古着は、鑑賞者の文化的背景の違いを超え、時代の中で変化する風景や人々の生活について思いを巡らせるための重要な役割を担っている。

[1] Hou Hanru, Hung Wu, Stephanie Rosenthal. (2015).*Yin Xiuzhen - Phaidon Contemporary Artists Series.* Phaidon Press Ltd., p.126. 本文中の引用は筆者による訳。

[2] 尹が古着を素材とした最初の作品は、《Dress Box（ドレス・ボックス）》（1995年）である。本作では、作家の父親が長年愛用していたスーツケースの中に、ピンク色の襟付きシャツがセメントで固められた。中国の都市開発で大量に用いられてきたセメントもまた、尹作品における重要な素材のひとつである。

[3] たとえば、クリスチャン・ボルタンスキー（1944-2021）は、大量の古着を集積させることで、歴史的惨事に巻き込まれた人々の存在を想起させ、かつてそれらを身につけていた個人の生と死を提示した。また、ナイジェリアとイギリスの国籍を持つインカ・ショニバレCBE（1962-）は、鮮やかな色と模様が特徴の布「ワックスプリント」を取り入れ、「アフリカらしさ」の概念や、権力構造や格差の問題を提示する。ワックスプリントは、古代インドで生まれたろうけつ染め「バティック」に起源を持つ。植民地主義時代、ヨーロッパで大量生産されたバティックがアフリカへ輸出されたことで普及し、皮肉にも現代のアフリカの人々のアイデンティティを象徴する存在となっている。

Exhibition Schedule　展覧会スケジュール

開催中

開館5周年記念 杉戸洋展：えりとへり / flyleaf and liner
会期：2025年12月5日（金）～2026年5月17日（日）

休館日：火曜日（ただし4月14日・21日・28日、5月5日は開館）、5月7日（木）

「杉戸洋展：えりとへり / flyleaf and liner」　会場風景　撮影：成田写真事務所

現代の日本を代表する画家の一人である杉戸洋（1970年生まれ）の個展です。本展で、作家はカンヴァスを囲む「えり」や「へり」などの「余白」に目を向けます。1990年代から最新作までの絵画を中心に紹介するほか、グラフィックデザイナーの服部一成とのコラボレーションによるインスタレーションを展開します。

コラボレーター：服部一成
友情出品：ゴクラ・シュトフェル

同時開催

コレクション展 2025-2026

煉瓦造りの建物や地域に合わせて制作されたコミッション・ワークをはじめとした、国内外のアーティストによる収蔵作品を紹介するコレクション展です。今回は、2025年度の新収蔵作品を中心に「未完の豊かさ：奈良美智と杉戸洋」と「北へ向かって」と題した2つのセクションで紹介します。

出品作家：雨宮庸介、潘逸舟、工藤麻紀子、奈良美智、蜷川実花、大巻伸嗣、ジャン＝ミシェル・オトニエル、ナウィン・ラワンチャイクン、斎藤麗、佐藤朋子、シャギャーン（奈良美智＋杉戸洋）、和田礼治郎、吉田真也

工藤麻紀子《春の山をあみこむ》2023年
弘前れんが倉庫美術館蔵（牧寛之氏寄贈）
撮影：髙橋 健治
Courtesy of TOMIO KOYAMA Gallery

開催予告

風間サチコ展：方丈ルームの1000里眼
会期：2026年6月5日（金）～11月15日（日）

風間サチコ（1972年生まれ）は、木版画を主な表現手法として、近代化によって変化した日本社会に関心を寄せ、その矛盾や皮肉な状況を描いてきました。本展は風間の東北初開催の個展です。近年の大型木版画に加え、青森の景勝地の風景と物語の世界を組み合わせた、作家にとって新たな挑戦となる色鮮やかな絵画を発表します。

風間サチコ《ありがとう、我が愛する白鳥よ！》2026年　作家蔵
©Sachiko Kazama　Courtesy of the artist and MUJIN-TO Production
撮影：宮島径

開催予告

大正⇆令和アヴァンギャルド（仮称）
会期：2026年12月4日（金）～
2027年5月16日（日）［予定］

大正から昭和初期の東北における前衛美術と、令和に制作された現代作家の作品を紹介します。日本で前衛的な芸術表現が花開いた大正時代は、当館の建物が建設された時期でもあります。本展では、百年の時を超えて共通する、既成の価値観に抗い自由を模索する作家たちの表現を通じて、日常の風景や出来事を新しい視点で捉えるきっかけとなることを目指します。

参考図版　雨宮庸介《H&T. A,S&H. B&W.（ヒール＆トゥー、アップル、ストーン＆ヒューマン、ブラック＆ホワイト）》2022年
弘前れんが倉庫美術館蔵　撮影：成田写真事務所

弘前れんが倉庫美術館
［開館時間］9：00～17：00（12月～2月は9：30開館）
［休館日］火曜日（祝日の場合は翌日に振替）、年末年始
〒036-8188 青森県弘前市吉野町2-1　［TEL］0172-32-8950　［Mail］info@hirosaki-moca.jp
当館には駐車場はございません　※お車でお越しの際は近隣の有料駐車場をご利用ください

［表紙写真（中央写真を除く）］撮影：成田写真事務所
［デザイン］デザイン工房エスパス　［印刷］凸版メディア株式会社
［編集・発行］弘前れんが倉庫美術館（指定管理者 運営業務担当　エヌ・アンド・エー株式会社）
［発行日］2026年3月20日

弘前れんが倉庫美術館 公式ウェブサイト
弘前れんが倉庫美術館 公式SNS

弘前れんが倉庫美術館
HIROSAKI MUSEUM OF CONTEMPORARY ART